慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	私の大学院論
Sub Title	
Author	金, 官圭(Kimu, Kangyu)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2003
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.特別号『将来編』 (2003.) ,p.53- 56
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	創設50周年記念特別紀要 第2部
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-000S2003-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

私の大学院論

金（キム）　官圭（カンギュ）（啓明大学校［韓国］社会科学大学助教授・本研究科博士課程修了［1998年］）

日本から韓国に帰国してもう4年近くになる。幸いにもすぐに地方の大学に職が決まり，今は学生を教える立場になっている。私が勤める大学にも修士課程と博士課程が設けられており，大学院の授業も担当している。大学院の授業では，私が大学院時代に教えを受けた方法に基づいて院生を指導している。そのことで様々な問題に出会った時，すぐに私は指導を受けた先生方の指導方法を思い出す。修士一年生からは，慶應義塾大学の大学院に入ったばかりの未熟な自分の姿が見えるし，すこし生意気な博士課程の院生からは，若干の研究成果を得たことで自慢していた当時の自分の姿が見える。

三田の大学院校舎は，私にとっての日本そのものと言ってもよい。日本に留学していた八年間，ほぼ毎日大学院の校舎で時間を過ごしたので，未だにあの建物が私の記憶に鮮明に残っている。大学院校舎での時間が，現在の自分を育ててくれたと感じている。三田の大学院校舎ですばらしい先生に鍛えられ，良い研究仲間に巡り合い，すこしずつ成長したのである。三田の自由な研究環境は，今でもうらやましい限りである。三田図書館の充実した文献と利用しやすいシステムのおかげで，研究活動に何一つ不便を感じることはなかった。それらのすばらしい環境に恵まれて八年間の課程でそれなりの成果を得たからこそ，今，一人前の研究者になっているのだと思う。八年間という長い時間を過ごしたので，慶應義塾大学大学院には色々な思い出が残っている。そのせいか，三田もしくは慶應義塾大学という言葉を聞くと，やや懐かしさの方が先にたち，大学院論という重い主題の話をうまく展開できないのであるが，ここでは小論を書くというよりは私の個人的な経験に基づいて，日本の大学院教育システムが持っている長所と短所について述べてみたいと思う。

日本で博士号を取り帰国した私には，韓国の研究者の世界は相当に異質なものに映った。韓国の大学教授は，殆どがアメリカに留学し，アメリカの教育システムに慣れている。特に私の専攻であるマス・コミュニケーション分野では，日本に留学した研究者は2，3人くらいしかいないので，韓国の研究者の間に日本の教育システムやマス・コミュニケーションの研究動向は殆ど知られていない。これはただ日本の教育システムやマス・コミュニケーションについての認知の問題のみならず，日本で教育を受けた研究者たちに対する評価にも関連してくる。

すなわち，アメリカに留学した研究者たちはアメリカのことしか知らず，また韓国の大学院ではアメリカの教育方法を殆ど踏襲しているので，他のシステムが持っている長所にあまり目が向けられないのである。アメリカのシステムに馴染んでいる研究者にとっては，日本の教育システムはやや理解しにくい面があることは事実である。

まず，修士課程や博士課程で取った授業科目が同じであり，担当教官も同じであることを非常に不思議に考えているようである。なぜ同じ授業を二度も取ったのかという質問を幾人もの研究者に聞かれたことがある。彼らは，日本の教育システムは学生にあまり多様な知識を教えていないのではないかということを指摘している。同じ先生の同じ科目を取るということは，その内容に多様性がないはずだと判断しているようである。コースワークという教育システムの下で，それぞれの専門領域で教科書に書かれているような習うべき知識が明確に確立されており，それに忠実に従わなければならないシステムで教育を受けた人の目から見ると，確かにそのような指摘があるのは，わからないわけではない。

二つ目によく聞かれる質問は，日本ではコースワークが終わる時点で，学位論文を書く資格を与えるための総合試験があるのかというものである。私は修士論文を書く前はもちろん，博士論文を書く前にも総合試験を受けたことがなかったので，その質問に，そのような専門知識の水準を総合的に評価する試験制度はないと答える。そうすると，それなら学生が教育を受け論文が書けるレベルに至っているかどうかの判断をどのような方法で下すのかと聞かれるのである。私は，アメリカのように確立された制度はないが，指導教官が学生の研究活動に基づいてそのレベルを判断し，論文を書く時期を決めるのだと答える。

私はこの二つの質問に答える時，すなわち授業科目が同じであることと総合試験がないことを答える時に，日

本とアメリカの大学院教育システムの違いを明確に感じる。日本で授業科目が同じであっても，そこに多様性がないとは，私は考えない。そして総合試験がないからといって，学生に学位論文が書ける能力がないとは考えない。授業科目が同じであっても毎年その授業の内容は異なるし，学生はその授業を取りながら，総合試験が無くても専門的な知識が要求される論文が書けるレベルには十分至っているのである。そしてその結果として，それぞれの専門分野で活発に活躍できる研究者を排出しているのである。

研究者を排出することには違いがないが，なぜアメリカで教育を受けた研究者たちは，日本の大学院教育システムを不思議に思うのだろうか。その理由は，日本とアメリカでは教授が大学院の学生を扱う立場が違うところにあると私は思う。アメリカで，授業の科目が多く，その成果を試験で評価するということは，大学院の学生をあくまでも学生としてしか扱っていないということであろう。学生としては，先生の徹底的な指導の下で教えられることで，短い時間に多くの知識を吸収できる。前もって選定した教材を与えて決まったコースに従って授業を取らせ，その成果を総合試験で評価するというのは，先生が学生を評価する典型的なやり方である。アメリカでは，大学院生はこの段階に至るまでは一方的に教えられる受動的な存在なのである。

これに比べて日本の大学院では，先生が学生を扱う時に，学生と一人の研究者との二つの側面で判断している。すなわち，日本の大学院教育システムでは，大学院生になることは専門的な研究者の道を歩き始めたと考えられる。大学院生はまだ専門知識が足りない学生なので一定の知識の教えが必要であるが，同時に研究者の側面をも持っているので，個々人が自律的に自分の研究主題に関する専門的な知識を探して吸収することが求められているのである。この特徴が，授業の内容からも，学位論文を書くレベルに至っているかを判断する際にも，いつも現れる。授業では，同じ分野を専攻している研究仲間の助けを得ながら関連分野の知識を学習し，そして自分の研究を緻密に進めて行く。日本では，大学院生が学位論文が書けるレベルに至っているかどうかは，課程でいかなる研究成果を上げたかが主要な判断基準になっている。すなわち，博士課程の間に一人前の研究者になれる能力をどの程度培ってきたのかが判断基準になるのである。

このように，大学院生に対する先生の扱いの違いが，授業のやり方や評価の仕方に影響を及ぼしている。アメリカの大学院生はまだ自律的な研究を行う存在としての完全な資格を持っていないと認識されているが，日本の大学院生は研究に入門した研究者として扱われているように思う。このことを端的に示すことを，私は博士課程在籍中に経験した。私が『社会心理学研究』への投稿を目指して論文を書いていたときのことである。この論文の研究問題を解決するためには，インターネットを利用した社会調査を用いてデータを集めなければならかった。調査対象は日本人の学生ではなく一般のインターネット利用者なので，調査対象に接近することはなかなか難しかった。そこで，ある日本人の大学院生の協力を得て共同研究の形で調査を進めようと考え，その計画を授業で発表したことがある。このような計画に対して，指導教授はその場で私の研究姿勢を厳しく指摘して一人で研究を進めることを求めた。指導教授が，私のような外国人が日本社会を対象にして経験的研究を行うことの難しさを理解していないわけではない。しかしながらそのような指導をなさった理由を一言でいうと，大学院生，特に博士課程の者に何より必要なことは，まず自立した研究者の能力を持つことであり，共同研究はそれに役立たないと判断されたからである。共同研究は自立した研究能力を持つ個々人の研究者が行えば相乗効果を生み出すが，まだそのレベルに至っていない者同士では決してよい結果を得ることができないということである。目先の壁を避ける目的で共同研究の形で人の助けを借りることは，個人の研究能力の向上に役立たないことを教えていただいたのである。その指摘に刺激を受け，私は共同研究の計画を捨てて，一人で調査を行った。そしてまとめた論文を『社会心理学研究』に投稿し，掲載されたのである。

この一つの経験が，甘かった私の研究姿勢を大きく変えると同時に，研究者にとってなにより大事な自分に対する信頼感を得ることができた。なかなか難しい研究を自分一人の力で成し遂げた時，それは後の研究への大きな力になるのである。今はその経験が私の大学院生時代の大きな財産になったと考える。その経験から得た自信に基づいて，後続の研究を進め，博士の学位取得に挑戦できたと思うのである。

私の個人的経験をすこし長く述べたのは，日本の大学院教育システムが一人の研究者を育成する方法を明確に説明するためである。このような私の評価は，アメリカや日本の教育システムを余りにも単純化してしまっているかも知れないが，すくなくとも慶應義塾大学大学院の優れた教育システムの下で，私は他の研究者とマス・コ

ミュニケーション研究について対等な立場で議論する力を養った。今は他の研究者と共同研究も行っているが，研究過程における自分の役割をしっかり果たし，それが更なる相乗効果を生み出すようにいつも心がけている。

これまでは日本の大学院教育システムの長所について述べたが，これからは私の目から見た短所にふれてみようと思う。

日本の大学院における問題として，大学院の教授の構成が閉鎖的であることが指摘できる。教授の構成が閉鎖的であるということの意味は，外国で教育を受けた研究者が少なすぎることである。

日本は国家次元から言うと，自国で必要な大学教員を自国の教育システムで養成できる国であり，その面では教育の先進国であると言える。しかし，日本の場合は教員の採用を国内出身者に頼る傾向が強すぎるためか，大学の教授を目指す学生が海外へ留学しようとする度合いが低いのである。そして日本で博士号を取得することが非常に厳しいので，日本で取得せずに，外国で学位を取ることをやや低く評価する傾向もある。最近はこのような傾向に変化が起き始め，海外で学位を取った研究者も教授になる事例が増えている。しかし，大学全体からいうと未だにそのような事例は少数で，従来の傾向は決して弱まってはいないと感じる。

なぜ大学教授の採用を国内出身者に頼りすぎることが問題になるのであろうか。それは，そのことが学問の活発な交流を妨げるからである。同じ先生の下で教育を受けた研究者が持っている知識の多様性には限界がある。もちろん個々人の研究者の能力に違いがあるので，このことはすべての研究者に当てはまるわけではない。やや一般化しすぎて述べている危険性はあるが，学問にも人的交流が無ければ新しい見解や理論の交流が非常に遅くなる。若者が異文化の中で新しい知識を吸収し，それを自国の文化とうまく混じえることによって，学問の世界が広がり発展するのである。

私は，日本が異文化を非常にうまく吸収する特徴をもっていることを知っている。その特徴は教育分野も例外ではなく，近代学問の受容過程からもその特徴を観察できる。幕末から，日本は西洋に使節団を派遣して社会制度を学び，それを日本の社会にうまく定着させてきた。特に学問の領域では，明治時代から海外留学制度を設け，積極的に人材を派遣し養成した。明治時代，短い時間で西洋文明を学ぶもっとも効率的な方法として考え出されたのが，直接経験によって知識を吸収した人材を育成することであった。この政策が効いて，日本はアジアの中で唯一近代化に成功したと言える。明治時代には海外留学が集中的に行われたが，その後，高等教育は日本国内で行われるべきであるという認識の変化が起きた。これは，海外留学という政策は学問的に遅れている後進国が短期間に先進文明を導入しようとする目的で行うものであり，近代化に成功した日本にとっては，もはやその政策の必要性がなくなったということであろう。

しかし，現在，日本の大学院の教育システムを評価してみると，国内中心の教育が適切なレベルを超え，やや閉鎖的になっているように思われる。そのことで，日本の学問が，時代の変化にやや鈍くなっていると考える。このような私の評価に対する反論も有り得ると思う。特に社会科学の研究対象は，研究者個人が住んでいる社会の現象であるので，海外で教育を受けた研究者よりも日本国内で長い研究経験を積み上げた研究者の方が，より深い研究ができるという考えも有り得る。この点から見ると，日本の研究者は確かに日本の社会について非常に深く考察し，研究成果を上げていると言える。

ところが，今は人や情報の交流が，もはや一つの国に留まる時代ではない。学問の世界でもこのような現象が起きている。学問の国際化とも言える，他の国の学者との学問的交流が非常に活発になっているのである。その交流を通して理論の普遍性を追求する動きが盛んになっている。この文脈から言うと，日本の研究者たちも，自国の社会の特殊性を探求しすぎることから脱して，世界の変化にもっと敏感になってほしい。もちろん絶対的なレベルで言うと，他の国と比べて外国の学者との交流が決して少ないというわけではない。指摘したいことは，日本という国が世界の中で占めている地位に比べると，社会科学，特にマス・コミュニケーション分野における研究動向が，やや日本国内の現象に偏りすぎているのではないかということである。

私は，日本は近い将来に今指摘した問題をうまく解決して，よりよい大学院教育システムを整備できると断言できる。これは先ほど述べた異文化の長所を早く，そして日本の文化にうまく適応させることができる日本文化の受容力の強さをよく知っているからである。私が指摘した日本の教育システムが抱えている問題は，日本の学者の方がもっと詳しく知っているはずである。そして，現にもう日本の教育システムに徐々に改革が起こっていることは，私も新聞や放送を通して知っている。

大学院教育システムの改革の最も重要な目標は人材育成であり，優秀な研究者が，大学や大学院で教育や研究を担当することである。これを達成するために多様な政

策の導入が必要であるが，私は，日本以外の文化の中で教育を受け，社会を見る目が日本国内で教育を受けた研究者とは異なる人材をどんどん取りいれて，やや停滞しているように見える現在の教育システムに新しい風を吹き込むことを提案している。

話の流れを若干変えて，現在韓国の大学院教育システムにおける変化を日本と比べてみたい。現在韓国の大学では改革の嵐が吹いている。学部教育のやり方はもちろん，大学院の姿も変えようとする動きが盛んになっている。その改革の主な目標は，世界的に優秀な大学もしくは大学院のような競争力を韓国の大学院にも持たせることである。その目標の下で色々な教育政策が実行されているが，その一つが韓国国内で優秀な研究者を育成出来る大学院教育システムの整備である。この政策の背景には，今まで韓国の高等教育を担ってきた人たちの殆どが海外留学経験者だということがある。大学の学部を卒業して海外の大学院に留学し博士号を取得するということが大学の教授になるための方程式である。そのため，研究者の数は増えても自律的な大学院の教育システムは整備されず，むしろ最近は韓国国内の大学院に進学する学生たちが急速に減少して，大学院教育の存続自体が危機にさらされるような事態になっている。これに危機感を感じた韓国政府は，教育政策として国内の大学院教育の質を高めるために莫大な予算を投入している。

このような韓国の状況は，日本の研究動向と非常に対照的な現象を起こしている。海外で教育を受けた研究者たちがどんどん帰ってくるので，研究の関心事の変化が非常に速いのである。その速さは，一つの社会現象をじっくり分析する余裕を与えない。すなわち，学問の理論や関心事が，一つの流行現象のように短い時間の間に現れては消えて行くのである。このような傾向によって，韓国に住んでいながら韓国社会の現象を長い時間をかけて研究するという姿勢を持つ研究者が少ない。

韓国の事情を述べた理由は，現在の日本と韓国がそれぞれ抱えている大学院の教育問題を解決するためには，変化が速すぎる韓国のシステムと，やや遅い感じがする日本のシステムの融合が必要なのではないかと考えるからである。前を向いて邁進する傾向が強い韓国文化と，変化に対してやや慎重すぎる日本文化の融合に，今両国が抱えている教育問題の解決策があるかもしれない。

ここまで個人的な経験に基づいて私の大学院論を述べてきた。日本の大学院教育システムが抱えている問題は提起したが，その解決策を明確に示すことができなかったのは私の能力がいたらないためである。この課題は時間をかけてじっくり考えていきたいと思う。